The Japan Lung Cancer Society

九州支部

の小細胞性未分化癌と右B_1入口部(5×4mm)の扁平上皮癌の，多発性原発肺癌の1切除例を経験した．

症例，66才男性，喫煙歴(−)，胸部単純で右中肺野の結節性陰影，左右肺門陰影の増強を認める．気管支造影，気管支鏡検査の結果，右B_1入口部の肺癌を別に認めた．同部からの生検で扁平上皮癌の診断を得たが右S_3aの生検は不成功に終った．以上より肺内転移あるいは多発癌の疑いで右上葉切除，リンパ節廓清を行ったが，非治癒切除になった．切除標本検索の結果，各々異った組織像を呈し連続性を認めないことより多発性原発肺癌と診断した．

我々が集計した多発性原発肺癌の本邦例の自験例を含めて24例について若干の考察を加えた．

3．孤立性小陰影を呈した細気管支肺胞上皮癌の2手術例

国立熊本病院内科　白石民夫
紫藤忠博，三嶋英一
熊本中央病院内科
絹脇悦生，木山程生，木山程荘
同　病理研究科　大塚陽一郎
国療再春荘外科
岩崎健資，山田　紘

最近われわれは直径2cm以下の，淡い孤立性小陰影を呈し，手術により細気管支肺胞上皮癌と診断され，その後経過良好である2症例を経験したので報告する．両名とも無症状で，集検により始めて胸部異常影を指摘されている．いずれも喫煙歴のない女性である．孤立性小陰影を呈す細気管支肺胞上皮癌の手術予後は，かなり良いことが報告されている．しかしながら小陰影の時期に診断することは難しく，我々の2症例においても，気管支ファイバーによる細胞診にて異常細胞を検出していない．胸部レ線フイルムよりの術前診断について検討を加えたので報告する．

4．肺胞上皮癌10例の臨床的並びにX線学的検討

長崎大学第2内科　今村由紀夫
植田保子，冬野誠三
雨森博政，籠手田恒敏
奥野一裕，原　耕平

われわれは，過去9年間に手術及び剖検にて確診された10例の肺胞上皮癌を経験した．年令は44〜80才，平均59.5才，男女比は2：3であった．入院時のX線病型は孤立結節型3例，多発結節型2例，孤立浸潤型1例，多発浸潤型2例，混合型2例であった．発生頻度は，当教室では約2.5%であった．TNM分類はI期3例，II期4例，III期3例で，初発症状は発熱・咳嗽が約半数にみられた．治療は手術7例，化学療法単独3例であった．平均生存期間は，肝不全で死亡した例を除外すると約3年5ヵ月と比較的良好であった．

5．組織型より見た原発性肺癌のX線学的検討

久大放　福嶋真由美，谷村陽子
小金丸道彦，大竹　久

病理学的に組織型の判明した原発性肺癌症例の単純，断層像103例，気管支造影像87例について，検討を行ない，組織型に基づく特徴的X線像の把握を試みた．

腺癌では，淡く，辺縁不鮮鋭な腫瘤が多く，pleural indentation及び胸水等の二次変化像を呈し，気管支造影所見としては，尖型閉塞，末梢性集束が多く認められた．扁平上皮癌では濃く鮮鋭な腫瘤が良性様空洞，粗大notch，太い癌放射を有し，二次変化像として無気肺を呈するといった所見が多く見られた．気管支造影にては，不整又は中断閉塞という多発する所見と共に，PSDB，腫瘍内造影等の本組織型に特徴的所見もみられた．未分化癌は非常に多彩であった．

6．最近経験した小細胞未分化癌11例の臨床病理学的検討

熊本大学第1内科　平岡武典
重永孝治，渡辺春海
杉本峯晴，尾崎輝久
福田安嗣，安藤正幸
志摩　清，徳臣晴比古

最近3年間，当教室で経験した小細胞癌の11例を，WHOの分類に従い4型に分けると，fusiform cell type 3例，polygonal cell type 0例，lymphoid-like type 6例それにothersが2例であった．各々について，治療効果及び予後について検討した．fusiform cell typeでは効果例が少なく，短期間で死亡している．othersでは特に化学療法に対する治療効果が認められ，lymphoid cell typeはその中間に位置した．肺癌の中で小細胞癌は経過が短く，予後が悪いと言われているが，組織型で若干の差異があることが解った．なお，ホルモン産生を示す例は認められなかった．

7．当院における原発性肺癌の臨床的解析（第2報）

長崎市民病院第2外科　内
林田正文，小森宗治
浦　繁郎，福井　純
池辺　珂，中野正心
同　外科　林田政義
同　放射線科　嶋長陽一

当院で経験した原発性肺癌60症例についてその臨床的解析を行った．性年令分布は，男女比2：1で70才以上のいわゆる高令者肺癌が47%を占めていた．組織型では腺癌が34例と最も多く，

NII-Electronic Library Service